



Marine Turtler

マリンタートル

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌

第15号





表紙の絵 東和音さん

今号の表紙のイラストを描いてくれた東さんは、デザインを学んで、将来はウミガメ保護を呼びかけるポスターや、様々なデザインに携わる仕事に就くのが夢だそうです。素敵なイラストをありがとうございました。

表紙の絵を募集しています。

皆様から表紙の絵を大募集しています。可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方は、ぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

- サイズ：B5
- 色：自由。(仕上がりはモノクロになります。)
- 期限：×切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、お早めをお願いします。
- 応募方法：大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。
- 送付先：〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
日本ウミガメ協議会 マリントートルー編集部
※メールの場合は info@umigame.org まで
件名に「マリントートルー表紙」と明記の上お送り下さい。

会報の名称マリン・タートル(Marine Turtler)は、英和辞書には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きな人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリン・タートルと呼ぶことを提唱したいと思います。



Contents

ウミガメ基礎講座 14	3P
「カメフジツボから思いを馳せるアカウミガメの暮らし」	
松沢慶将	
マリントートルー列伝	4P
「天草の救世主・吉崎和美さん」	
亀崎 直樹	
ウミガメの民俗 8	5P
「奄美のウミガメ漁」	
藤井弘章	
第30回国際ウミガメ学会参加報告	7P
インターンシップ報告	8P
悠ちゃんプロジェクト2009-2010	9P
経過報告 & 悠ちゃん義肢基金	
Marine Turtle Divers Projectからのご報告	11P
うみがめ目線	12P
久米満晴	
事務局の主な動き	13P
ご寄付を頂いた方々	14P
Seaturtle goods shop	
日本ウミガメ協議会の組織体制が変わりました	
STSmembers募集中! & STSmembers更新手続きについて	
編集後記	

「カメフジツボから思いを馳せるアカウミガメのくらし」 松沢慶将

フジツボという動物がいる。岩礁や岸壁などにびっしり固着している、富士山のような形をした殻を持つ、あれである。頑丈な殻を持つので、かつては貝の仲間と間違われることもあったが、蔓脚類と呼ばれる甲殻類の仲間と分類される。エビ、カニなどが歩行に用いる脚の部分が蔓状になっていて、これを、殻の「火口部」から伸ばして、プランクトンなどをつかまえて食べている。

フジツボの中には、カメフジツボのように、固着する場としてウミガメの甲羅に特化したものがある。岩礁に固着するフジツボとは異なり、頂上部が平坦なドーム型をしており、色は白く、大きいものでは長径が8cmほどになる。ちょっとしたアクセサリのように見えなくもない。

さて、産卵にやって来るメスのアカウミガメを調査していると、背中のカメフジツボについてもあれこれ気になる。これが、回遊先や年齢の手がかりになればいいのにと思いながら眺めていると、とりあえず、カメフジツボがどっさりついている個体とそうでないものがあることに気づく。そういえば、人の場合、肌のシミ、身につけるジュエリーも、歳を重ねるごとに増える。というのは例えとして不適切かもしれないが、ウミガメの場合も、カメフジツボがついていないものは若く、たくさんカメフジツボを背負ったものを年季の入ったメスなのだろうか？いや、そうに違いない、と勝手に納得してみるのだが、はたして、現場ではそれを支持する事実もある。たとえば、和歌山県みなべ町千里浜に産卵にきたアカウミガメを、カメフジツボがついているものとそうでないものに分けてみると、体は、前者の方が大きいのだ。平均すると甲長で数センチもの違いにもなる。ということは、カメフジツボのある・なしは、ウミガメが成長するにつれカメフジツボが付着していくからとの解釈で、……完璧だ！

ところが、産卵個体ごとにその後の回帰や成長を詳細に調べていくと、この解釈は脆くも崩れ去る。まず、撮りためていたウミガメの背甲の写真を、同じ個体が数年後に再び産卵に戻ってきたときのものとを見比

べると、以前あった大きなカメフジツボは、剥がれ落ちていくことが多く、しかも、肌のシミとは異なり、跡が残らないのだ。また、数年後に再び産卵に戻ってくる個体は全体の3割程度で、残りの7割は二度と戻ってこない。さらに、戻ってきたメスも、年間数ミリ程度しか成長していないのだ。これでは、カメフジツボのある・なしや、そのサイズの違いを、ウミガメの成長で説明するのは無理である。

では、一体、どう考えたらいいのだろうか？比較的体の大きなアカウミガメは東シナ海などに浅い海域で底生生物を、そして小さなものは、沖の深い海域で浮遊生物を餌にして暮らしているという話に照らして、カメフジツボの有無も、ウミガメの生活環境の違いに対応していると考えるのがいいかもしれない。すなわち、沖で暮らしている比較的小さなアカウミガメの背甲にはカメフジツボがつきにくい、剥がれやすく、逆に東シナ海など暮らす大きなアカウミガメではカメフジツボがつきやすいか、或いは剥がれにくいというストーリーである。

しかし、この解釈にも疑問は残る。カメフジツボがつきやすいというのは、カメフジツボの幼生に遭遇する確率が高いということであり、言い換えれば、カメフジツボを背負った他のアカウミガメに高い確率で接近するということである。はたして、繁殖期は別にして、アカウミガメがそんなに集中することがあるのだろうか？それとも、カメフジツボの産卵期にあわせて、どこかに集まるのであろうか？あるいは、ウミガメの他にまだ知られていない主要な宿主が存在して、そこからウジャウジャと幼生が撒き散らされているのだろうか？

といったことを、アカウミガメの背中についてカメフジツボを眺めながら、ああだの、こうだのと考えをめぐらせて見るのも、なかなか楽しいものである。(了)

「天草の救世主・吉崎和美さん」

亀崎 直樹

熊本は決してウミガメの産卵が多いところではない。天草諸島の西岸に毎年十数回の産卵が見られる程度である。その天草に住む吉崎和美氏が最初のウミガメ会議に現れたのが、第9回の屋久島会議(1998年)の時でした。学校で事務職員を務める吉崎さんは、幼少の頃から遺伝的にあったと思われる博物学的センスに基づく天草の自然を知り尽くした方で、干潟の生物でも湖沼の生物でも海洋の生物でも、何でも詳しいわけです。

その彼が屋久島会議の非公式な場で話したのが「白鶴浜」の危機でした。天草には西にいくつかの浜が点在しています。あまり大きな砂浜が存在しないのですが、その中で最も大きな砂浜が「白鶴浜」あるいは「高浜」と呼ばれる砂浜なのです。彼が言うには、その白鶴浜が危ないというのです。

危なくなった原因は、最近私がいたところで主張している「港湾の整備」に他ありません。砂浜の南端に高浜港という漁港があるのですが、その漁港を拡張したことから不幸が始まります。いつも通りに砂は漁港内に溜まります。さらに悪いのは、川が浜の南側の河口から流れ込みます。鶴が翼を広げたような美しい砂浜の格好がバランスを崩します。北側、つまり右の翼が細くなり、南側の翼が太くなってきたわけで

す。さらに悪いことに北側の砂浜の陸側には集落が存在し、波はこの砂浜を越えて集落に襲いかかるようになったのです。

すると熊本県は考えました。浜の中央部に突堤(ヘッドランド)を延ばし、砂が南へ移動するのを防いで、浜を維持しようと思ったわけです。北側にはさらに砂を導入し、人工ビーチにしようとしたわけです。突堤は丁度鶴の頭から首に見えるし、景観的にもよろしいというわけです。

吉崎さんはそんな浜の整備計画をきいて、何かをしようとしたに違いありません。私を天草に何度も招待してくれて、何度も交渉に伺ったのでした。飛行機で天草空港に到着すると、吉崎さんは必ず迎えにきてくれます。トレードマークはおっさんぞうりです。吉崎さんは、いつも、なぜか草履というよりもスリッパをはいて、やってくるわけです。

吉崎さんの行動力はそれだけではありません。干潟が埋められるときと、埋め立てに反対します。ダムができるとなると、それも反対します。しかし、今の天草を思うとき、彼の行動力がなければ、今の天草の自然がいくつも消えたことでしょう。天草の救世主といっても過言ではないのがこの人である。



工事後の白鶴浜。北側(写真の左側)を養浜した直後のようす。

温泉でくつろぐ吉崎和美氏



奄美のウミガメ漁

今回は種子島のアカウミガメ漁について紹介しました。種子島にはアオウミガメ漁もありますので、その話も紹介したいのですが、その前に奄美のウミガメ漁について取り上げて見ます。

2009年から2010年にかけて、4回ほど奄美に行かせてもらう機会がありました。これまで、沖縄本島、種子島で、ウミガメの民俗調査をしてきましたが、その中間にあたる奄美でははじめての調査でした。その結果、とても興味深いことが分かってきました。

民俗的にみれば、種子島、屋久島からトカラ列島まではヤマト文化圏、奄美大島以南の南西諸島は琉球文化圏に属しています。もちろん、民俗の境界というのは、1本の線で区別されるわけではなく、一定の幅をもって何本もの境界線が引かれるので、奄美大島などには、ヤマトの影響もかなり見られます。

今回の調査では、奄美大島、加計呂麻島、与路島で、ウミガメの捕獲方法について聞いて回りました。事前に、協議会の亀崎直樹会長と水野康次郎氏、および地元の教育委員会や博物館、漁協などからある程度の情報を得て回り始めました。

その結果、まずは、奄美群島でも、沖縄、種子島と同様、ウミガメを捕獲し、食用とする習俗が広範囲にみられたことが分かりました（ただし、聞き取りの対象としたのは、鹿児島県ウミガメ保護条例が制定される以前の昭和50年代ごろまでの話です）。さらに、細かく捕獲方法について聞いていくと、3種類の捕獲方法があることが分かってきたのです。

1つは、産卵のために上陸したウミガメをひっくり返す方法です。これは、沖縄などでもよく行われていた方法です。奄美では、アカウミガメとアオウミガメを捕獲していたようです。大島南部から加計呂麻島、与路島方面では、アオウミガメを捕獲することもありましたが、大島北部ではアカウミガメがおもだったようです。これは、産卵状況と関係していると思われます。

沖縄と同様、産卵して海へ帰るところをひっくり返すという言い方も確認できました。これは、

藤井弘章

おそらく、ウミガメの子孫を残しながら利用していくという民俗的な知恵のひとつと考えられます。カメの後ろから縦に返そうとすると、そのまま海へカメを押していってしまう。斜めに返さないといけない、という知恵も聞きました。アカショウビンが鳴くと、ウミガメが産卵に来るという自然知は、奄美大島、加計呂麻島、与路島全域で確認できました。奄美でなじみのあるアカショウビンとウミガメが結びつけられて語られるのはとても興味深いです。与路島などでは、アカウミガメとアオウミガメを足跡で見分ける知識もありました。

そのほか、次のような自然知も聞くことができました。アオウミガメのほうが、アカウミガメよりも産卵時期が遅い。夕方、海岸で首を出してオカを見ていると、今夜上がると分かる。引き潮のときに上がる。小潮のときに上がる。大潮だと、上がってから降りていくのに遠い。リーフが高い浜だと大潮に上がることもある。リーフが低いと中潮でも上がる。上がってすぐのところには産んでいない。穴をいくつか掘っている。台風が来るときは、浜の上まで上がる。これらは、いずれも産卵地における自然知です。奄美の人々にとって、ウミガメはそれだけ身近な生き物であったのでしょうか。

なお、奄美市笠利町では、カメをひっくり返すときには、死んだ人の名前を言ったといいます。大型の陸上動物でも、同様の例がありますが、ウミガメではほとんど聞くことができない事例です。

2つ目の捕獲方法は、潜水してウミガメを捕まえるというものです。おもにアオウミガメを捕獲しましたが、アカウミガメを捕獲する人もいました。これを行うのは、沖縄・糸満から奄美に来ていた漁民でした。糸満漁民は潜水漁を得意としていましたので、海底にいるアオウミガメを捕獲することはそう難しいことではなかったようです。素手で捕まえることもあれば、カメの首にカギを掛けて、ロープで引っ張り上げるといこともありました。彼らはどこにアオウミガメの巣があるのかよく知っています。このように、彼らは海底のウミガメについての知識は豊富なのですが、産

卵するウミガメに関する知識はあまり持っていません。上陸するウミガメは関心がなかったのでしょうか。

ところで、奄美の漁民はこの捕獲方法を行うことはなかったのでしょうか。明治時代の水産調査では、奄美の人はウミガメの捕獲方法を知らない、と書いてあります（『水産調査予察報告』第一巻第二冊、農商務省水産局、1980年）。実は、奄美の人も、ウミガメ捕獲方法を知らなかったのではなく、上陸するウミガメをひっくり返すのは太古の昔から行っていたと考えられます。宇宿貝塚、屋鈍貝塚などの遺跡からウミガメ遺体が大量に出土していることからそれはうかがえます。しかし、潜水してのアオウミガメ捕獲は、糸満漁民が大勢奄美にやってくるようになった明治時代末期以降、ようやくそれを習い覚えたということのようです。だれでもできるようになったのではなく、奄美の漁民でも、限られた人だけがこの漁法を習得してアオウミガメを捕獲するようになりました。このように、潜水してアオウミガメを捕獲する方法は、奄美独自のものではなく、明治時代になって、沖縄から伝わったものであることがうかがえます。

3つ目の捕獲方法としては、船上から鉈でアカウミガメを突き捕るものがありました。これは、前回の種子島のアカウミガメ漁で紹介した方法と同じです。こうしたアカウミガメ捕獲は、九州南部、四国南部、紀伊半島南部、北部伊豆諸島に見られました。沖縄では確認していません。したがって、奄美の調査を開始するまでは、私自身、奄美でもこの方法があるとは、まったく予想していませんでした。聞き取りで、奄美でもアカウミガメを鉈で突き捕ることがあったと確認したときは、正直驚きました。この方法は、大和村南部、奄美市住用町、奄美市笠利町で確認しました。喜界島にも鉈でカメを突き捕る方法があったようです。大和村南部の場合は、明治時代末期に、鹿児島県佐多岬周辺の人が、カツオ漁に出かけてきた地域です。大和村南部、宇検村、瀬戸内町西部には、このときカツオ漁が伝わりました。これらの地域は、奄美のカツオ漁の発祥地といわれています。佐多岬周辺は、やはり鉈でアカウミガメを突き捕ることがありましたが、大和村ではカツオ漁のときにアカウミガメを突いたといいます。したがって、大和

村のアカウミガメ突きは、佐多岬のほうから伝わったものと考えられます。大島東海岸や喜界島のほうはいつ伝わったのか分かりませんが、大島北部や喜界島には、古代から本土との交流があったようです。このため、本土方面の漁法が、いつの時代かに伝わっていったと考えてもよさそうです。

このように見てくると、奄美におけるウミガメ捕獲方法は、奄美の方法（ひっくり返す）、沖縄から伝わった方法（潜水による捕獲）、本土から伝わった方法（鉈での突き捕り）、という3つに分類できることとなります。しかも、奄美の方法は、奄美大島、加計呂麻島、与路島全域で確認できます。沖縄からの方法は、全域で確認できますが、糸満系の漁民がいた地域に限定されます。本土からの方法は、カツオ漁が伝わった地域か、大島東海岸の北部と喜界島に限られます。奄美の歴史は、奄美世、那覇世、大和世などと呼ばれることがあるように、沖縄やヤマトと交流し、ときに北から南からの支配を受けながら歩んできました。

そして、長い時間をかけて、さまざまな民俗が、琉球とヤマト（薩摩）とのほざまで、融合してきたといえます。ウミガメの捕獲方法は、まさに奄美の歴史と民俗を体現しているということです。

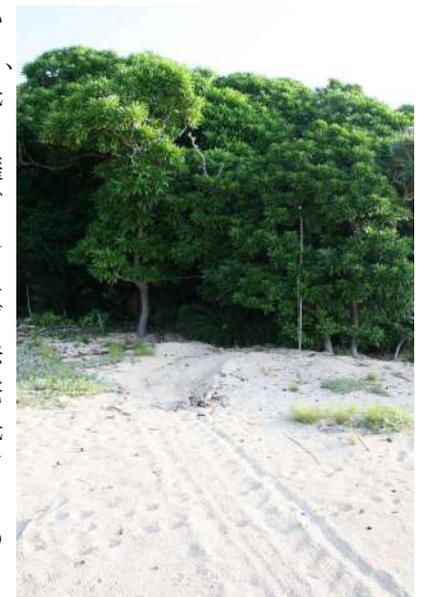


写真1. アオウミガメの足跡 (与路島, 2009年8月1日撮影)



写真2. ウミガメ捕獲用のカギ (龍郷町)

岡本慶

2010年4月27日から29日まで第30回国際ウミガメ学会(30th Annual Symposium on Sea Turtle Biology and Conservation)がインドのゴアにて開催されました。ゴアはインド南西部に位置するインド最小の州で、その州都パナジにあるKala academyが今回のメイン会場でした。今年で30回目を数えるこの学会には、世界各国から大勢の人が集まります。日本からも、京都大学、東京大学、東京海洋大学、ELNA、そして日本ウミガメ協議会などに属するウミガメ研究者が参加しました。当会からは、松沢慶将主任研究員、石原孝研究員、佐藤嘉威事務局員、優谷真理研究員、筆者の5人が参加しました。

今大会では口頭115題、ポスター302題の計417題の発表がありました。その発表のテーマは遺伝学、行動学、生態学、系統学、保護に関わるものなど様々で、どれも興味深いものばかりでした。当会からも、石原研究員がアカウミガメの成長速度について、佐藤事務局員がダイバーズプロジェクトで皆様からお寄せいただいた写真を元に解析した結果について、優谷研究員は野生ウミガメ類の健康評価について、筆者は日本近海におけるクロウミガメの発見状況について、それぞれポスターにて発表してきました。今大会が同学会初参加となった筆者は、単語を並べただけの英語とボディランゲージを駆使して、世界のウミガメ屋に懸命に説明したのでした。わかってもらえていたかは別として…。さて、筆者がこの学会に参加して最も感激したのは、これまで、書籍や論文などでしか知らなかった世界の”超”有名な研究者と話すことができたことでした。Peter Prichard博士、David Owen博士、Brian Bowen博士などの大研究者に筆者のような若造がしかもヘタクソな英語で話しかけても、優しくたくさんのことを教えてくれるのです。世界の研究者と”ウミガメ談義”が出来たことは、これから先もずっと心に残るであろう初参加の思い出となりました。

ここから先はちょっと余談になりますが、せっかくのインドということで少しだけ足を伸ばしてケオラディオ・ガナ国立公園に行ってきました。そこにある池には7種のスッポンが棲息しているそうなのですが、なんとそのスッポンたち水を飲みに来たウシを襲って食べることもあるのです!!カメがウシを・・・襲う?どうやって?集団で?全く想像もつきません。皆様そんなシーンの写真や映像をお持ちでしたら、ぜひ当会にお寄せください。



バンケットの様子



左から、石原孝研究員、松沢慶将主任研究員、来年第31回大会のPresidentのJeffery A. Seminoff博士、ウミガメ生理学の大家David Owens博士、優谷真理研究員、筆者、韓国ウミガメ研究第一人者 文大淵博士

インターンシップをはじめて 杉山 享史

私は昨年の夏に、地元で産卵調査をお手伝いさせていただいたのをきっかけに、日本ウミガメ協議会のことを知り、3月23日よりインターンシップに参加させていただいております。普段は協議会事務局で慣れないパソコンを使った事務作業を手伝っていますが、時折外での作業を手伝うこともあります。その中の一つに高知県室戸から兵庫県須磨へのウミガメの搬入作業がありました。道中、暴れるウミガメに手を焼きながらの作業ではありましたが、貴重な体験であったと思います。実際、現場に出てみないと分からないことを知ることができ、いろんな人と会う機会が増えるなど有意義な時間を過ごさせていただいております。今後も微力ながらも協議会の役に立てるように、頑張っていきたいと考えております。



インターンシップ報告 名古屋市立大学大学院 人間文化研究科 博士前期課程2年 阿部朱音

私は一昨年に高知県室戸市にある室戸基地で約2ヶ月間インターンシップをしました。またウミガメ食文化のある室戸で、当会が活動しているウミガメの保全について漁師さんの思いを聞き取り、卒論としました。昨年には漁業調査に参加し、徳島以外の四国3県で漁師さんの話を聞いてまいりました。『人間と動物がうまくやっていくには何が必要か』が私の問題意識の芯なのですが、その意味でも興味が尽きませんでした。例えば四国の漁師さんのウミガメに対する認識は、ゲテモノから神様まで実に様々でした。所変われば品変わる、かもしれません。でも調査を通じ、この多様さが『うまくやっていく』ために大変重要なのではないかと感じました。貴重な機会をいただいて、心から感謝しています。未熟なりに努力して、少しずつ貢献したいです。



インターンシップ報告 神戸大学農学部 辰巳 敬哉

半年間、日本ウミガメ協議会でインターンをさせていただき、フィールドワークからデスクワークまで、様々な経験をすることができました。フィールドワークでは、色々な海岸に行き、調査の手伝いをしたり、また実際にウミガメと触れ合うことができ、日常の中では決して体験できないことができました。また、デスクワークでは、日本中から集まるウミガメ情報の整理や、ウミガメ会議の準備に関わることもできました。そこで、生きた情報に触れて、ウミガメに対する関心の高さや、ウミガメがいかに興味深い生き物であるかということを改めて知ることができました。短いインターン期間でしたが、新たな知識も増えて、これからの自分の進路についても考えるいいきっかけとなり、非常に有意義な時間を過ごせました。



インターン募集中!

実際に就職する前に、あるいは在学中に休学する形で、当会のスタッフになっていただき、業務を学んでいただくことができます。文書の作成、フィールドワーク、データの収集管理など、日常の業務を身に付けていただけます。また、インターンシップの過程で、適職を見つけ就職されることも可能です。

悠ちゃんプロジェクト2009-2010

2008年、鮫に両手を食べられてしまった悠ちゃんは、2009年6月より人工ヒレの装着試験をおこなっています。義肢で有名な川村義肢(株)をはじめ、多彩な分野の専門家メンバーが総力をあげて人工ヒレの開発をおこなっています。今シーズンも昨年の反省点を踏まえ、新しい人工ヒレの開発と挑戦が始まります。



人工ヒレ・モデル第1号から第5号モデルまで。悠ちゃんにフィットし泳ぎやすいヒレになるようにと、素材や形等に改善が加えられバージョンアップしてきました。最新の第5モデルは上腕で抑える部分を軟らかい素材を使用し、そこにメッシュでヒレをつくり、より弾性のある素材で先端をつくりました。



9月12日に3回目の人工ヒレ(第5モデル)の装着試験を行いました。前ヒレの傷口部分を确认后、関節の動きを妨げないように慎重に人工ヒレを装着。悠ちゃんは人工ヒレにも慣れてきた様子で、前回よりも上手にヒレを使って力強く砂浜を歩いて人工池に戻って行きました。

10月16日に第5回人工ヒレ開発プロジェクト会議を行いました。この会議に先立ち、初めて第5号モデルで長期に渡る装着を行い解析の結果、人工ヒレを装着したことにより、前肢の可動範囲が狭くなり、遊泳力が低下した事や筋力が衰えてしまった事がわかりました。今後は遊泳力が上がる人工ヒレを目指すことになります。



12月5日、神戸空港人工池で2009年最後の健康診断と、両前肢基部の型取りを行いました。前回の最終装着試験で褥瘡(じょくそう)様のキズが確認された為、今後は須磨海浜水族園で治療を受け、傷が治り獣医師のOKができれば、装着試験を行うことになります。



経過報告

- 2008年 6月25日 紀伊水道にて発見
- 6月26日 神戸空港島人工海水池に保護する
- 12月13日 徳島県美波町日和佐うみがめ博物館へ避難
- 2009年 1月14日 川村義肢に協力要請、人工ヒレプロジェクト開始決定
- 3月2日 第1回検討委員会
- 3月10日 日和佐の悠ちゃん体調崩したため、水温管理のできる特別水槽へ
- 4月4日 悠ちゃんの性判別 雌であることが明らかに
前肢基部の型とり、アカウミガメ遊泳運動の解析用画像撮影
- 5月31日 ラグーンに移動 加速度ロガーにより行動解析データを収集
- 6月19日 第1回検討委員会
- 6月20日 第1回人工ヒレの装着試験を実施
- 7月25日 第2回人工ヒレの装着試験を実施
- 9月12日 第3回人工ヒレ装着試験を実施
- 10月16日 第5回人工ヒレ開発プロジェクト会議
- 10月16日 第5回人工ヒレ開発プロジェクト会議
- 3月17日 第6回人工ヒレ開発プロジェクト会議
- 4月24日 悠ちゃん須磨海浜水族園へ引越し

前ヒレをなくしたウミガメを助けて！

悠ちゃん義肢基金にご協力をお願いします！

前ヒレをサメに食いちぎられたアカウミガメの「悠ちゃん」！
このウミガメがまた元気に泳げるようにしてあげたい！
専門家の方々をメンバーに加え「悠ちゃんプロジェクト」が始動しました。
人工ヒレを作るのは困難ですが、悠ちゃんにぴったりのヒレを作れるよう、
「悠ちゃん基金」にご協力をお願いします！！

振込み口座はコチラ



池田泉州銀行 枚方北支店
店番号：045 口座番号：0540977
口座名：ウミガメ義肢基金 代表者赤井絵里香
カタカナ：ウミガメギシキキ

ゆうちょ銀行
口座番号：00900-1-170710
ウミガメ義肢基金 カタカナ：ウミガメギシキキ

Marine Turtle Divers Projectからのご報告

三井物産の助成を受け、2008年4月からウミガメ類の水中における生態解明のため、「マリンタートルダイバーズプロジェクト」が始動し2年が経過しました。皆さまのご協力により、生物学的に興味深い写真や芸術的に優れたなど、1437枚、486個体の水中写真を集めることができました。これまでに撮影された地域は、東京都、福井県、静岡県、和歌山県、高知県、熊本県、鹿児島県、沖縄県の1都7県59地域です(2010年4月末日現在)。これらの種組成をみると、アオウミガメが優先していることが明らかとなりました。この要因として、アオウミガメがダイビングポイントである岩礁海域やサンゴ礁海域を好んで生息しているためと考えられます。助成事業としてはあと半年で終わりますが、終了後も独自で続けていきたいと考えておりますので、今後とも皆さまからのお便りをお待ちしております。



ウミガメの海中写真をお送りください



第1回えこがめ賞 大場様



第1回うみまー賞 白神様

ウミガメの写真なら何でもOKです!!

たとえウミガメが小さく写っている写真でも周辺の環境を知ることができます。

日付、場所、水深などのデータがあれば送って下さい。

この企画に寄せられた写真の中から、

ウミガメの生物学上貴重な写真、芸術的に優れた写真を選び、「えこがめ賞」と「うみまー賞」として表彰させていただきます。

●応募はメールまたは郵送でお願いします

NPO法人 日本ウミガメ協議会

「マリンタートル・ダイバーズ・プロジェクト」係 まで

■メール diver@umigame.org

■郵送 〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302



応募者全員に
Save the Umigame
ステッカーをプレゼント

このプロジェクトは三井物産環境基金の助成を受けて行っています



ダイバーズプロジェクトではこれまで全国各地の様々な方からウミガメの写真を投稿していただきました。中にはプロのカメラマンもいらっしゃいます。今回はそんなカメラマンの中から、ウミガメの気持ちになって波やウミガメの写真を撮られている久米満晴さんを紹介させていただきます。

うみがめ目線

久米満晴



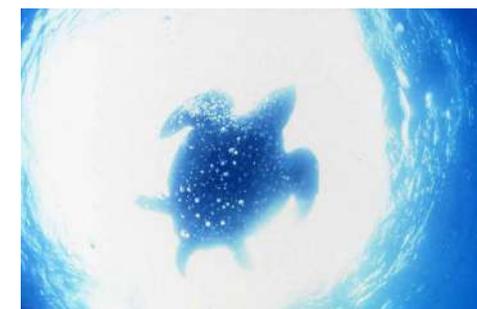
うみがめが見ている景色、僕の撮る写真、そこには共通しているものが多い。それは、僕は南の島で暮らし、漁業に携わりながら、サーフィンをしたり、波の写真を泳いで撮ることが好きなので、うみがめと出会うことが多く、人間の中では、かなりうみがめに近いところで暮らしているからです。

でも、そんなうみがめとの関係は、決して「かわいい」といった感情だけではありません。うみ

がめが漁の網に入れば、鮮度がいのちの水揚げ中には漁師モードの自分には「邪魔」な存在として映ります。重さ70キロものうみがめを船上で動き回らないようにひとりでひっくり返すのは、怪我に注意しながら大変な作業ですし、それが一度に8頭も入ることだってあるのです。また、サーフィンをしに浜辺に行けば、無残なうみがめの死骸が打ち上がっている姿を見ることがもしばしばです。とは言え、うみがめを探しに潜って出会えたら嬉しいし、産卵や孵化を見に夜な夜な浜辺を歩いて、出会えた時の嬉しさは、言葉では表せないものがあります。

うみがめと近くに暮らす。それは、うみがめの陰と陽を見ることになるのです。

僕の写真のテーマ「うみがめ」は、漁に入ったうみがめにタグ(番号札)が付いていたことにはじまりました。アカウミガメは太平洋を股にかけた生活を知り、そのロマンある暮らしに驚きました。やがて、うみがめが絶滅危惧種であることや、砂浜の減少から産卵場所が狭くなり、台風で卵が流されることの深刻さを知り、僕は僕にしか撮れないうみがめの陰と陽を、写真を使って多くの人に伝えたいと思うようになりました。



僕には夢があります。うみがめと同じ太平洋を渡ること。カメラを持ってカメを追いかけるカメラライナー計画です。今年の夏は、日本で最も産卵の多い屋久島そして種子島周辺の島々、トカラ列島を調査撮影します。風の力を使いヨットでの航海です。うみがめを追いかけ、うみがめの新しい発見を写真に残す。そして、それを伝える写真展やスライドショーを行う。

それが、7200万年前から生きているうみがめが、人間によって絶滅させてしまわないように、少しでも力になればと思っています。

- 8月5日 「のぞみ」が産卵した卵を洲本市由良の成ヶ島へ移植
- 8月5日&6日 第5回西部太平洋区漁業管理評議会ウミガメ諮問委員会に出席
- 8月8日 大阪府貝塚市立自然遊学館で講演
- 8月8日-9日 「まるごと泉州in神戸空港島」に出展
- 8月11日 兵庫県洲本市成ヶ島で移植と産卵調査
- 8月30日 「Return to the WILD ウミガメレスキューうみへかえそう」を開催
- 8月31日 南あわじ市灘沖でアカウミガメの混獲がありました
- 9月1日-4日 みなべ千里浜で孵化率調査&食害対策を実施
- 9月6日 生物多様性条約COP10プレシンプोजウムに出席
- 9月9日 孵化率調査in 生見海岸を実施
- 9月12日 神戸人工池で「第2回 ウミガメ・エコツアーリズム」を開催
- 9月18日 南さつま市野間池で「野間池うみがめ談義」を開催
- 9月27日 神戸空港での「空の日」イベントへ出展
- 10月18日 嘉陽小学校のある名護市嘉陽へ
- 10月22日 2009年度2回目の協議会ゼミを開催
- 11月2日&6日 イルカさんのチャリティライブ「未来につづく地球のいのち」に出店
- 11月19日 韓国でのシンポジウムに招かれ講演
- 11月27日-29日 第20回日本ウミガメ会議(宮崎)の開催
- 12月10-12日 エコプロダクツ2009に出店
- 2月1日 「紀伊半島ウミガメワークショップ」を開催
- 2月6日&7日 「ワン・ワールド・フェスティバル」に出展
- 3月6日 2010年1回目の協議会ゼミを開催
- 3月12日 第5回関西元気な地域づくり発表会に参加
- 3月27日 ライオンがアライグマ対策を支援
- 3月29日 ハワイ シーライフ・パークにてアオウミガメを放流
- 3月30日&31日 第6回西部太平洋区漁業管理評議会ウミガメ諮問委員会に出席



池田希 石原誠吾 井上尚志 岩渕政子 内田保 奥田恭子 蔭山純由 鎌田武
河端嶺・玲 木村ジョンソン 九埜勝家 黒須裕子 小林茂夫 近藤康男 山田輝一
藤中功 橋本博夫 照本善造 齋藤敏郎 坂本旦 阪本登 佐藤克文 佐藤弘子
清水紀代美 大地昭 貴志康宏 谷内透 田端重夫 玉岡昇治 床田真美 中嶋香奈
永野裕也 波多野真樹 橋本結亀 畠山香菜 坂東武治 東和音 日高安義 福西快文
福原富士美 藤中功 振原理恵 堀田耕平 松下陽子 松平和子 護得久明美
森田悦郎 安田十也 通事太一郎 阿郷絹代 多胡彰郎 シャディ(株) (株)ライブ
アマゾンジャパン(株) (株)ホテル日航アリビラ (株)エイ出版社 バイヤーズ(株)
ヤフー(株) (株)M'sDS (有)ジュネ はまゆう商店 神戸東ロータリークラブむつみ会
NPOパブリックリソースセンター エコポイント事務局 福井県立大学 (有)横浜観光商会
神戸メリケンパークオリエンタルホテル 南知多ビーチランド 串本海中公園センター
SUKA hair ビーチアン hau'oli RYU-RYU

(順不同・敬称略)

Seaturtle goods shop

インターネットでお買い物

うみがめグッズがインターネットショップからご購入いただけます。オリジナルグッズのご購入はもちろん、会費のお支払いやご寄付にもご利用いただけます。お支払いは代引き、各種クレジット、ネットバンキングで当会イーバンク口座等からお選びいただけます。

アクセスはこちらのアドレスへ

<http://seaturtle.shop-pro.jp>

携帯電話でお買い物

モバイルショップ(携帯電話)からもアクセスしていただくことができます。下記のアドレスから、または右のQRコードを読み取ってご来店ください。



アクセスはこちらのアドレスへ

<http://seaturtle.shop-pro.jp>

日本ウミガメ協議会の組織体制が変わりました

日本ウミガメ協議会の職員はこれまで大阪府枚方市の大阪事務局、八重山諸島黒島の黒島研究所、高知県室戸の室戸調査基地の3地点を中心に活動してきましたが、この4月に会長の亀崎が神戸市立須磨海浜水族園の園長を兼務することになり、若干、組織体制が変化することとなりました。以下の部署と担当者で運営致しますのでよろしくお願いたします。

- 大阪事務局(枚方市長尾元町) 072-864-0335
水野康次郎(事務局長)・佐藤嘉威(事務局員)・井上直美(経理担当)・宮原尚子(広報担当)
村上真由美(会員担当)・杉山淳史(インターンシップ)
- 須磨研究室(神戸市須磨区) 080-3386-6592
亀崎直樹(会長)・松沢慶将(主任研究員)・谷口真理(研究員)・石原孝・岡本慶・優谷真理(研究員)
- 黒島研究所 0980-85-4341 若月元樹(所長)・亀田和成(研究員)
- 室戸調査基地 0887-22-1685 福家弘晃(調査員)

◆ STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートして下さるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで、自然が好きな方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非入会をお誘い下さい。

入会金：なし、年会費：個人会員3,000円、学生会員1,000円、団体会員10,000円、特別会員100,000円
会員特典： オリジナル会員証&グッズ、機関誌

◆ STSmembers更新手続きについて

今までメンバー更新手続きの書類を、マリンタートラーに同封してお送りしていましたが、今後は会員期限終了月に更新のご案内を送付させていただく事になりました。更新月を迎えられる会員の皆様は、更新の手続きをお願い申し上げます。

会員の皆様のご支援がウミガメやそれを取り巻く環境を保全してゆくサポートになります。今後ともウミガメ協議会をよろしくお願いいたします。

なお、すでにご登録いただいている内容に変更がございましたら当会までご一報ください。

編 集 後 記

2009年はNHK朝の連続テレビ小説「ウェルかめ」の放送にはじまり、悠ちゃん義肢プロジェクトまで、ウミガメ関連の番組やニュースが多く放送され、ウミガメに注目が集まった年でした。イベントなどに出展している時も、小さな子供さんから壮年の方まで「ウェルかめ見ているよ～」と声をかけていただいたり、「悠ちゃん応援しています!」と励ましの言葉をいただいたり・・・ウミガメの知名度がどんどん上がってきているのを実感できました。2010年もウミガメの調査や研究、シンポジウムやイベントの開催等、ますます会員の皆さんとのコミュニケーションの場を広げて行きたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

編集担当：宮原尚子

マリンタートラー(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2010年3月31日
発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

電話：072-864-0335 Fax：072-864-0535

URL <http://www.umigame.org> E-mail info@umigame.org

